

# 大磯町における全国学力・学習状況調査結果の報告

平成 28 年 1 月 12 日

大磯町「全国学力・学習状況調査」結果分析・活用検討委員会

## 「教科に関する調査」結果の分析及び活用について

### 【小学校国語】

#### 国語 A 主として「知識」に関する調査

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域では、漢字の読みについては全国・県の平均正答率とほぼ同程度であるが、漢字を正しく書くことについては課題がある。指導に当たっては、習得した漢字を読んだり書いたりする機会を積極的に取り入れたり、国語辞典や漢和辞典を日常的に利用できる環境・習慣作りも必要である。また、文中の主語を捉えることについてやや課題がある。文法の学習や文章表現をとらえ、より主述の関係を意識した学習指導が必要である。

「話すこと・聞くこと」の領域においては、話の内容に対する聞き方を工夫することについて課題がある。出題では美化委員会からの提案を聞く 6 年生代表の青木さんの聞き方として適切なものを選択する設定となっているが、その中で特に提案の内容と自分たちの様子とを重ねて聞くことについての誤答が多かった。学習活動の中で相手の話を聞く際は、話の目的や意図を捉えながら内容を十分聞き取るとともに、取り上げられた内容について、自分の考えと比べ、共通点や相違点、関連して考えたことなどを整理し、自分の考えをまとめるように指導することが大切である。

「書くこと」の領域においては、具体的な事例を挙げて文章を書くことについては、概ね良くできているが、全国・県と比べると平均正答率はやや下回った。伝えたいことを分かりやすく説明するためには、伝えたいことの内容を明確にし、その内容に沿った具体的な事例を挙げて書くことが効果的である。学習指導の中で伝えたいことを説明する文章に具体的な事例を挙げた場合とそうでない場合を読み比べる中で児童に実感させる活動を取り入れることが大切である。

「読むこと」の領域では、新聞のコラムを読み、表現の工夫を捉えることは、特に筆者が引用している言葉を書き抜く問いで全国・県の平均正答率を上回ってはいるが誤答も多く課題が残る。「自分の考えを補いたい」「説得力を高めたい」など、児童が引用する目的意識や必要性を十分持てる言語活動を位置づけ、課題解決の過程で指導することが重要である。また、作品募集の案内から必要な情報を読み取ることについても課題が残る。文章や資料から情報を適切に捉えるためには、全体の構成や見出しなどに着目し、文章や資料の書き方の特徴を踏まえた上で、読み手にとって必要な情報を捉えるように指導する必要がある。

## 【小学校国語】

### 国語B 主として「活用」に関する調査

今回は「話すこと・聞くこと」の領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関しての出題はなく、「書くこと」の領域、「読むこと」の領域をそれぞれ問うもの、あるいは二者を複合的に問うものが出題された。

「書くこと」の領域では、特に目的や意図に応じ、取材した内容を整理しながら書くことについて全国・県と比べてほぼ同程度ではあるが課題が残る。今回、新聞記事を書くという設定で、インタビューした人の感想を載せるための条件作文をする問いであったが、無解答率は低いものの、解答として話者の発言の理由、条件で示された話者の様子の両者を満たし、関連づけて書くことが十分でない例が多かった。学習指導に当たっては、取材した内容を書く活動の中で、事実と感想、意見等を区別する活動を取り入れるとともに、目的や意図に応じ、伝えたい内容が十分伝わるように、取材した複数の内容を整理して書く機会を多く持つことが必要である。同時に、「読むこと」の指導でも、説明的文章の中で事実と感想、意見を区別して読む学習が必要である。

「書くこと」「読むこと」の領域に関する問いでは、文章と図とを関連づけて自分の考えを書くことについて、全国・県の平均正答率とほぼ同程度であるが一部課題が残る。今回は分担図をもとに書く部分と説明文の決め方に関する重要事項とを組み合わせるのだが、誤答のうち、後者が正しく読み取れていない場合が多かった。文章と図表・グラフなどを関連づけて自分の考えをまとめるためには、図表やグラフなどが添えられた文章を提示し、それらを関連づけて読んだり、自分の考えを書いたりする指導を意図的に行うことが必要である。

「読むこと」の領域については、目的に応じ、中心となる語や文を捉えることについては全国・県の平均正答率とほぼ同程度であった。その一方、登場人物の行動を基にして、場面の移り変わりを捉えることは全国・県と比べてやや下回り、登場人物の気持ちの変化を想像しながら音読することについては県を上回っていたが、全国の平均正答率には及ばず、やや課題が残る。場面の移り変わりを捉えるには、文学的文章における「場面」は、時間・場所・登場人物の性格や気持ちなどによって変わることを指導する必要がある。各場面の様子を、登場人物の行動や会話、情景などの叙述を根拠にしながら適切に捉えるとともに、場面と場面を関連づけて読む指導が必要である。登場人物の気持ちを想像しながら読むことについては、場面の移り変わりに注意して、登場人物の行動や気持ちの変化を捉えることが重要である。そのためには、音読の工夫については、声の大きさや質、読む速度、間の取り方等の観点を示し、繰り返し音読する中での気づきを実感できるようにする。また、児童同士のペア学習やグループ学習の中での聞き比べにより、互いに助言する活動を通して、自分の音読に生かす学習も大切である。

国語Bでは県と同様、設問が後半に向かうにつれ無解答率が上昇している傾向が見られた。今後はこうした課題を町として共有するとともに、児童が難解な問題に対しても積極的に取り組む姿勢を授業の中で育てていく必要がある。

## 【中学校国語】

### 国語A 主として「知識」に関する調査

調査結果から基礎的・基本的な知識・技能の定着は全国・県と同様、一定程度図られていることが読み取れる。また、問題の出題形式が選択式もしくは短答式であり、問題量は小学校段階と比べて増えているものの、全体的に無解答率が低いことから、昨年度同様、調査問題へ真摯に取り組もうとしている姿がうかがえる。

「話すこと・聞くこと」の領域では、相手の反応を踏まえて話すこと、必要に応じて質問しながら聞き取ることについては、全国・県の平均正答率と比べて概ね満足できる状況である。一方、聞き手の反応を意識して、分かりやすい表現語句を選択して話すことについては全国・県と比べてやや下回り、課題がある。日常の学習活動の中で、聞き手の反応を踏まえて、分かりやすい言葉に言い換えたり、説明を加えたりするように指導する必要がある。その際に言い換えた言葉が文脈に沿った正しい表現になっているか確かめさせることも大切である。

「書くこと」の領域については、意見を支える根拠の明確さについて助言することや書いた文章を読み返し、語句の選び方や使い方を工夫して書くことは全国・県の平均正答率と同様概ね良い。しかし、伝えたい事実を明確に書くことについてはやや課題が残る。説明や記録の文章を書く際には、目的や意図に応じて図表などの中から必要な情報を取り上げて適切に記述することが大切である。その際読み取った情報が正しいかどうかを確認し、読み手に正確に伝わる言葉を選択して記述することが大切である。

「読むこと」の領域については、登場人物の心情や行動に注意して読み、内容を理解することや、言動や話の展開に注意して読み、内容を理解すること、文章から適切な情報を得て、考えをまとめることなど概ね良い。その中で目的に応じて要旨を捉えることについても全国・県と比べて上回っているが、他の設問と比べるとやや低い結果となった。学習指導として、段落ごとの要旨を捉えたり、説明の順序に着目しながら必要な情報を表にまとめたりするなどの学習活動が有効である。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、文脈に即して漢字を正しく読むこと、文脈に即して漢字を正しく書くことについては全国・県の平均正答率と比べて上回っている。一方、語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことについては、慣用句や語句の選択に一部課題が残る。特に日常生活で使うことの少ない語句について指導する際には、実際に使われている場面を取り上げて意味を確認し、短文づくりや別の表現への言い換えをする活動が有効である。また、手紙の書き方についても生徒の知識に定着していない部分が見られる。社会生活上、必要となる知識・技能として国語での基本的事項を学習した上で、伝える相手の立場や気持ちに配慮し、手紙の基本的な形式を理解して書くように指導することが大切である。例えば総合的な学習の時間等で、依頼状やお礼状を実際に書くなどの学習活動と連携することが有効である。

## 【中学校国語】

### 国語B 主として「活用」に関する調査

国語B「活用」に関する調査では、出題形式は選択式もしくは記述式に分かれ、記述式については生徒にとって難易度が高かったと考えられるが、平均正答率が全国や県と比べてほぼ同様か、やや上回る結果となった。また昨年度同様、全国・県と比較して全体的に無解答率が低かった。小学校からの継続した学習活動の中で問題に取り組む姿勢が高まったと考えられる。今後、よい成果につながった指導を整理し、町として共有していくことが大切である。

「話すこと・聞くこと」の領域では、発表の際に用いるノートとフリップをもとにスピーチする場面が設定された。その中で、状況に応じて、資料を活用して話すことや効果的な資料を作成し、活用して話すことについては全国・県の平均正答率と同様で概ね良かった。しかし、「書くこと」の領域と関連させた出題では、目的や状況に応じて資料の提示の仕方を工夫し、その理由を具体的に書くことに課題がある。解答の際に、自身の考えを示し、字数の条件は満たしているものの、ノートの内容と関連づけて答えるという条件を満たしていない例が見られた。学習指導の中でスピーチやプレゼンテーションでは、話の要点を明らかにし、聞き手の理解を促すために資料の効果的な活用を考える必要がある。そうした活動の中で資料を使用する目的や提示のタイミングについて考える機会を設けるとともに、発表後にその内容や理由について話し合い、効果を確認することも大切である。

「書くこと」の領域では、「読むこと」の領域と関連させた出題の中で、複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書くことについては県や全国の平均正答率より上回ってはいるが、今後の課題といえる。学習指導の中で「書くこと」に関する言語活動に取り組みせる際に、多様な情報に触れながら問題意識を持ったり、新たな発想を得たりするために複数の本から得た情報を自分に結び付けて考えることが重要である。そのために、資料や文脈で述べている内容を正確に理解したうえで感じたことや考えたことを自身でしっかりとまとめ、互いの意見を交流させたい。その中で新たな気づきや問題意識を持てるよう指導することが大切である。また、自分の考えを深めたり広げたりするために、学校図書館やインターネット等のメディアを主体的に活用するよう指導することも大切である。

「読むこと」の領域では、文章の中心的な部分と付加的な部分等を読み分け、要旨を捉えることは全国・県と比較して上回っている。これについて、文章の要旨を捉える際に、論の中心となる部分と、それを支える例示や引用などの付加的な部分とを読み分けて内容を理解する必要がある。また、「書くこと」の領域と関連させた出題の中で、文章の展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめることについては全国の平均正答率より高いが県をやや下回っており、課題が残る。出題では物語の文章について最後の一文はあった方がよいかどうかについて話の展開を取り上げて理由を説明するものであったが、解答では自分の考えと理由について触れても、話の展開を捉えていないものも多く見られた。文章の展開について自分の考えを持つためには、物語の記述の有無により作品全体の印象がどう変わるかなどについて、根拠を示しながら書いたり、話し合ったりする学習活動を持ち、その中で自分の考えを支える根拠が明確に示されているかどうかを検討することが大切である。

## 【小学校算数】

### 算数A 主として「知識」に関する調査

「数と計算」領域において、繰り上がりのある2位数の加法の計算については概ね良好であった。しかし、小数の減法について、計算の結果のおよその大きさを捉えることや加法における計算の確かめの方法の理解、末尾の位のそろっていない小数の減法の計算に関して課題がある。計算の結果を適切に求めるためには、計算の手順の理解だけでなく、場面や状況に応じて計算結果を見積もる経験を豊かにすることが大切である。また、常に計算の結果について振り返って確かめる習慣づけも求められる。小数の加法及び減法の計算については、末尾をそろえるのではなく位（あるいは小数点の位置）をそろえて計算することの理解を確実に指導することが大切である。

「量と測定」領域において、 $180^\circ$  よりも大きい角のおよその大きさを、2直角、3直角を基に捉えることや $180^\circ$  や $360^\circ$  を基に分度器を用いて $180^\circ$  よりも大きい角の大きさを求めることについて課題がある。直角を基にして角の大きさの見当をつける場の設定や、補角を用いた測定方法を判断する活動を取り入れるなどして、角の大きさを正確に測定できるよう繰り返し指導する必要がある。

「図形」領域においては、示された三角形が二等辺三角形と判断される根拠となる円の性質を選択することや、円の性質から三角形の等辺を捉え、二等辺三角形の性質から底角の大きさを求めること、見取図と展開図を関連づけて立体図形の辺や面の位置関係を理解することに課題がある。作図などの活動を通して、図形のどのような特徴を用いているかを確認したり、角の大きさや辺の長さの求め方が適切である根拠を明確にしたりする活動が大切である。また、面と面どうしのつながりや位置関係について理解を深めるような指導が必要である。

「数量関係」領域は、全国や県の平均正答率とほぼ同程度であった。

## 【小学校算数】

### 算数B 主として「活用」に関する調査

「数と計算」領域では、概数を用いた見積りの結果とそれに基づく判断を理解し、3,000個集めればよい理由を記述することについては、全国や県よりも平均正答率が高い。一方、四捨五入して千の位までのおよその数にして計算することや、切り上げた場合の見積りの結果を基に、目標に達しているかについて判断することに課題がある。実際の数に近い数を知りたいという日常生活の目的と関連づけながら、「四捨五入」の用語の意味や処理の仕方についての理解を深めたり、数直線などの図に表し見積りの結果と実際の数の和との大小関係を視覚的に捉えやすくして話し合ったりするなどの活動が大切である。

「量と測定」領域では、条件を変更した場面で与えられた考えを適用して、示された部分の面積を求めることに課題がある。児童が場面や数値などの条件を変えて発展的に考察していくことができるような教材の工夫や、学習したことをさらに発展させて新たな問題を設定し、場面や数値などの条件の異同を確認したり、問題の構造を比較したりするなどして、学習した考えをどのように活用していくかを確認するなどの学習活動を設定する必要がある。

「図形」領域においては、正三角形の性質や合同な三角形の性質を基に、根拠となる理由を記述することについては、全国や県の平均正答率を上回った。また、平行四辺形の性質を基に、平行四辺形を構成することができる辺の組み合わせを理解することについては概ね良くできていたが、平行四辺形の作図の方法に用いられる図形の約束や性質を理解することに課題がある。作図する場面において、その操作の意味と図形の性質について関連づけた指導が必要である。

「数量関係」領域では、示された情報から基準量を求める場面として捉え、比較量と割合から基準量を求めることと、示された割り引き後の値段の求め方の中から誤りを指摘し、正しい求め方と答えを記述することに課題がある。基準量と比較量、割合の関係を的確に捉え、基準量を求めるために割合を捉え直す指導が必要となる。また、自分の考えを批判的に考察し、妥当かどうか評価するような場面を設定するなどの工夫が求められる。

昨年度と同様、全国や県と比較して無解答率が高い問題が見られた。一見すると難解な問題に対しても、知識を基に粘り強く解答を求めていく態度を今後も授業の中で育てていく必要がある。

## 【中学校数学】

### 数学A 主として「知識」に関する調査

「数と式」領域では、多くの設問で全国や県の平均正答率を上回った。しかし、数量の関係を文字式に表したり、小数を含む一元一次方程式を解いたりすることにやや課題が残る。数量関係を図に表したり、具体的な数や言葉を使った式を利用したりして関係を捉え、その関係を文字式に表すことができるように指導することが大切である。また、分数や小数を含む方程式は、等式の性質に基づいて簡単な形の方程式に直して解くことができることを確認したり、求めた解をもとの式に代入してその数が正しいかどうかを確かめたりする活動を取り入れることが大切である。

「図形」領域では、空間における直線と平面の垂直について理解することや作図の根拠として用いられている平行四辺形になるための条件を理解することにやや課題が残る。身近な立体を観察したり見取図を見たりして直線と直線、直線と平面、平面と平面の位置関係を考察する場面を設定するなどの指導の工夫が求められる。また、平行四辺形の作図の過程や具体物にみられる平行四辺形になるための条件を指摘する活動を取り入れ、平行四辺形になるための条件を具体的な場面で捉え、それをを用いることができるように指導することが大切である。

「関数」領域では、ほとんどの設問で全国や県の平均正答率を上回ったが、反比例のグラフがX軸、Y軸に限りなく近づく2つのなめらかな曲線であること、反比例のグラフはX軸、Y軸のそれぞれに限りなく近づくが交わらない2つのなめらかな曲線になることを理解できるように、グラフの通る点を調べる活動をしたり、コンピュータを活用し反比例のグラフを観察する活動を取り入れたりするなどの工夫した指導が必要となる。

「資料の活用」領域では、与えられた資料から中央値を求めることや、多数回の試行の結果から得られる確率の意味の理解に課題がある。対称や非対称など分布の形が異なる様々な資料について、資料の傾向を捉えるためにどの代表値を用いるとよいかを考察する活動を取り入れ、代表値の必要性と意味を理解し、適切な代表値を求めることができるような指導が必要となる。また、多数回を試行する実験などを行い、試行回数全体に対するある事柄の起こる回数の割合が一定の値に近づいていくことを実感するような活動を取り入れる必要がある。

全体として全国や県の平均正答率を上回っているが、その中でも課題となっている部分を整理し、今後の指導改善に繋げていきたい。

## 【中学校数学】

### 数学B 主として「活用」に関する調査

「数と式」領域においては、概ね良くできていた。しかし、事柄が成り立つ理由を、構想を立て根拠を明確にして説明することや振り返って立てられた構想に沿って、事象を数学的に表現し、その意味を解釈することにやや課題が残る。文字式や言葉を用いて解決するための見通しをもち、根拠を明らかにする場面を設定し、事柄が一般的に成り立つ理由を、構想を立てて説明できるような指導が求められる。また事象を数学的に表現し、その意味を解釈する場面を設定し、解釈したことを判断の根拠に用いることができるように指導することが大切である。

「図形」領域においては、発展的に考え、条件を変えた場合について証明することについては、全国や県の平均正答率を大きく上回り解答できた。しかし、平面図形と空間図形を関連づけて事象を考察し、その特徴を的確に捉えることにやや課題がある。観察、操作や実験などの活動を取り入れ、日常的な事象の特徴を図形やその構成要素に着目して的確に捉えることができるように指導することが大切である。

「関数」領域では、ほとんどの設問において全国や県の平均正答率と同程度の結果であったが、その中で事象を式の意味に即して解釈しその結果を数学的な表現を用いて説明することについては課題が残る。伴って変わる2つの数量が反比例の関係であることなど、関数関係を根拠として事柄が成り立つ理由を説明する活動を取り入れ、日常的な事象を数学的な解釈に基づいて考察し、事柄が成り立つ理由を説明できるように指導することが大切である。

「資料の活用」領域では、全ての設問で全国や県の平均正答率よりも上回ったが、資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することについては課題がある。ヒストグラムや代表値を用いて資料の傾向を捉え説明する場面を設定し、判断の理由を数学的な表現を用いて説明できるように指導することが大切である。その際、判断の理由をお互いに伝え合い、他者の主張を批判的に考察する場面を設定するなどの指導の工夫が求められる。

数学Bは全国や県よりも、平均正答率が上回る結果となった。また、無解答率は全国や県と比較して概ね低い結果となった。課題をあげるならば、与えられた情報を基に数学的に説明することについては改善の余地がある。指導の中で、解答について取り上げるだけでなく、なぜそうなったのかなどの過程に関して、説明したり話し合ったり、表や式を用いて文章に表したりする活動を取り入れていく必要がある。



## 【小学校理科】

### 理科 主として「知識」に関する問題

「A 区分 物質・エネルギー」では、水蒸気は水が気体になったものであることについては概ね理解しているが、メスシリンダーの名称の理解やメスシリンダーで一定量の水をはかり取る適切な扱い方については課題がある。器具の名称を正しく理解するために、実験目的に応じて必要な器具を主体的に選択し準備する活動を通して、器具と名称、使う目的を一致させて捉えるような指導が大切である。また器具の操作手順の理解だけでなく、操作の意味を捉えるような指導も必要である。

「B 区分 生命・地球」では、顕微鏡の名称の理解や、顕微鏡の適切な操作方法については、全国や県の平均正答率を上回っている。一方で、メダカの雌雄を見分ける方法の理解や月は1日のうち時刻によって形は変わらないが、位置が変わることの理解については課題である。魚を育て観察することを通して、ひれなどの形状の違う魚の存在に気付き、形状の違いにより雌雄を見分けられることを捉えるような活動が必要となる。また、時間ごとに月が見える方位や高さ、見える形を観察し、月の動きと時間の経過とを関連づけて考えるようにすることが大切である。

## 【小学校理科】

### 理科 「主として活用」に関する問題

「A 区分 物質・エネルギー」において、全ての設問で全国や県の平均正答率を下回る結果となった。特に、振り子の運動の規則性を振り子時計の調整の仕方に適用できることや熱膨張が小さい金属について、グラフを基に考察して分析した内容を記述できること、電磁石と磁石の同極が退け合う性質を振り子が左右に等しく振れる仕組みに適用できること、電磁石の働きを利用した振り子について、試行した結果を基に自分の考えを改善できること、予想が一致した場合に得られる結果を見通して実験を構想できること、析出する砂糖の量について分析するために、グラフを基に考察し、その内容を記述することについては大きな課題が残る。獲得した知識と実際の自然や日常生活に見られる事物・現象を関係づけて捉えられるようにしたり、観察、実験の結果を基に事実と解釈の両方を示す必要があることを理解したりすること、ものづくりの際には性質や働きをどのような仕組みに適用していくのか明らかにしたり、予想どおりの動きにならない場合は要因を抽出するなど改善しながらつくったりすることが大切となる。また、予想が一致した場合に得られる結果を見通して実験を計画したり、予想や考察を具体的な数値と結び付けながら考え、溶ける量や析出する量がどのように変化するかを捉えたりすることが大切である。

「B 区分 生命・地球」では、生物の成長に必要な養分のとり方について、調べた結果を視点をもって考察して分析できることについては、全国や県よりも高い平均正答率となった。その一方で、方位を判断するために、観察した事実と関係づけながら情報を考察して分析することや星座や雲の動きについて、観察記録を基に考察して分析できることについては課題がある。日頃から生活している場所での方位を感覚的に捉えておき、観察時には方位磁針を用いて方位を正確に調べた上で観察することが大切である。また観察記録を時系列で捉え、変化の様子を考察して分析することも必要である。

## 【中学校理科】

### 理科 主として「知識」に関する問題

「第一分野 物理・化学的領域」では、塩化ナトリウムを化学式で表すことやオームの法則を使って、抵抗の値を求めることについては、全国や県の平均正答率を上回った。一方、特定の質量パーセント濃度の水溶液の溶質と水のそれぞれの質量を求めることについてはやや課題が残る。実際に特定の質量パーセント濃度の水溶液をつくる学習場面を設定したり、溶質と溶媒の割合の関係を視覚的に捉えることができるように線分図を利用したりするなどの指導の工夫が求められる。

「第二分野 生物・地学的領域」では、天気記号から風力を読み取ることについては概ね良くできていたが、天気記号から風向を読み取り風向計を使って風向を観測することや背骨のある動物をセキツイ動物と表すことについては全国や県の平均正答率から下回った。天気記号から風向、風力を読み取るための基礎的・基本的な知識を身に付け、風向計の原理や仕組みを理解して風向を観測する技能を身に付ける学習場面を設定する必要がある。また、動物の仲間の学習では、比較の視点を明確にして動物を分類できることを認識させ、それらを活用する学習場面の設定が大切である。

## 【中学校理科】

### 理科 主として「活用」に関する問題

「第一分野 物理・化学的領域」では、グラフを分析して解釈し、化学変化について正しく読み取ることや他者の考えを検討して改善し、混合物を加熱したときの化学変化を説明することについては、全国や県の平均正答率よりも大きく上回る結果となった。一方で、日常生活の場面において、音の高さが高くなったといえる音の波形の特徴を指摘することについては、全国や県の平均正答率から下回る結果となった。また、実験の結果を分析して解釈し、炭酸水素ナトリウムを溶かした方の試験管を指摘することについては、全国や県の平均正答率を上回ったものの課題が残る。音の大小、音の高低に関する振幅と振動数の規則性を実験を通して見出させる指導が大切である。その上で、誰もが経験できる身近な現象を取り上げることで問題を見出し、課題を設定し、理科で学習した知識や概念を活用しながら課題の解決に取り組む学習場面を設定することが必要となる。また、溶解度に関する観察・実験の結果を基に、溶け残りの質量を溶解度の大きさと比較したり関係づけたりする視点をもって、分析して解釈する学習場面の設定が必要である。

「第二分野 生物・地学的領域」では、ほとんどの設問において全国や県の平均正答率を上回る結果となったが、一定の時間に多くの雨が降る原因を探る実験を計画することについては課題が残る。予想を確かめる実験を計画する際、はじめに変化することの原因として考えられる要因（独立変数）を全て挙げ、それらの妥当性を検討するようにする。次に挙げた要因（独立変数）を変える条件と変えない条件に整理して、実験を計画する学習場面の設定などが考えられる。

理科については、ほぼ全ての設問において、無解答率が全国や県よりも下回る結果となった。

## 「質問紙に関する調査」結果の分析及び活用について

### 【小学校】

平成 27 年度は、「将来の夢や目標を持っている」と回答した児童の割合が全国の調査結果と比較しても高かった。また、平成 26 年度と同様に、「朝食を毎日食べている」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した児童の割合も高い。

「学校のきまりを守っている」と回答した児童の割合は、平成 26 年度調査より改善傾向はみられたが、依然として全国や県の調査結果と比較して課題が残る。日々の学校生活の中のさまざまな場面で、規範意識を高めるための指導を、全教職員が共通理解のもと、学校全体で進める必要がある。

また、教科に関する調査との関連では、「調査問題の解答時間が全く足りなかった」あるいは「やや足りなかった」とする児童の割合が、全国の調査結果と比較して高かった昨年度より改善されたが、引き続き、日常の教科指導で学習目標と内容が子どもたちに理解できるよう意識していく必要がある。

一方、家庭において、学校の宿題には取り組んでいるが、家で授業の予習・復習をしている児童の割合が全国調査と比較して低く、6 年生という中学校への準備段階の学年としては課題と捉える。家庭学習の学習時間と平均正答率には相関があり、平日に学校の授業以外の勉強を「2 時間あるいは 3 時間以上している」児童の割合が全国の結果より高い反面、「30 分より少ない」「全くしない」児童の割合も全国調査と比較して高いため、引き続き家庭と担任とが連絡を密にして、家庭学習について適切な指導を行うことが大切である。

## 【中学校】

小学校と同様に、「朝食を毎日食べている」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒の割合は高い。

「学校の規則を守っていますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒について、平成26年度調査では、ほぼ全国と比較しても課題はなかったが、今年度は「どちらかといえば当てはまらない」と答えた生徒も多く、課題が残る結果となっている。しかし、全体的に落ち着きがあり、校則が少ない生活環境の中で、生徒たちの回答がなぜこうした結果に繋がったのかを町として教職員と共有し、分析をすすめる必要がある。

平成26年度は、「調査問題の解答時間は十分でしたか」に対して、「時間が余った」と答えた生徒は全国調査より多かったが、今年さらには「時間が余った」と回答した生徒の割合が高かった上に、国語・数学の記述式問題に「最後まで解答を書こうと努力した」と答えた生徒の割合も全国と比べて高く、特に数学の平均正答率との相関があった。

また、今回理科の結果で、大磯町では全国調査と比べ、「自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある」「理科室で実験や観察を週に1回以上行っている」「観察や実験が好き」「観察や実験の結果をもとに考察している」と考える生徒の割合が高い。これは、「理科の勉強が好き」「授業の内容がよく分かる」「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たとき役に立つと思う」と考えている生徒の割合が高いことが関連してくると考えられる。また今回、理科の問題においても、最後まで解こうとした生徒の割合も高く、平均正答率との相関もあった。

学校の授業時間以外の学習時間については、平日も土・日曜日も2時間あるいは3時間以上勉強している生徒が全国よりも多い反面、特に土・日曜日に「全くしない」生徒も全国の結果より多いため、引き続き、自分で計画的に家庭での学習をすすめられるように指導していく必要がある。